

19世紀～20世紀初めにおける ロシアの外国貿易

富岡 庄一

はじめに

従来、レーニンをはじめとして、ロシア資本主義を論ずる場合、外国貿易を「捨象」することが多かった。外国貿易を取り上げる場合でも、補論的な位置づけしか与えられてこなかったのが実状である。

しかし、ロシアのような後進資本主義国の場合、資本主義世界体制、とりわけ先進資本主義国からのインパクトを強く受け、それへの対応を示すなかで、資本主義が形成されていったのである。従って、ロシア資本主義の特質・矛盾を把握しようとする際、外国貿易は、国内的諸要因と少なくとも同等の重要性を持つものとして、配慮されねばならないであろう。外国貿易を研究対象として取り上げるゆえんである。

昨年度（1980年度）、筆者は、北星学園大学教職員の皆様の御好意で、一年前滞欧する好機を得た。その折に、1917年革命以前のロシア外国貿易に関する資料を少なからず収集することが出来た。主として、革命前に付けにされた統計・著書・時論風の論説、及び、20世紀初めにロシアに駐在したイギリス外交官が当時本国に送付したロシア経済・貿易についての報告書（これはロンドンのパブリック・レコード・オフィス所蔵の古文書から収集した）等々である。

今後、これら資料を検討・分析することによって、革命前のロシア外国貿易のありよう、及びその問題点を明らかにし、同時にそれとのかかわりの中で国内経済の発展過程を分析し、もってロシア経済の再生産過程をトータルに把握しつつ、ロシア資本主義の構造的特質・矛盾を明らかにしたい、というのが筆者の構想である。

以上のような構想のもとに今後研究を進めてゆくわけであるが、まずは、19世紀～20世紀初めのロシア外国貿易の全体像を大まかに理解する必要がある。本稿では、主としてヴェ・イ・ポクロフスキーの研究 (B. И. Покровский. Сборник сведений по истории и статистике внешней торговли России. Том 1, Спб., 1902) に依拠しつつ、その作業を行ないたい。

末尾ながら、国外研修を許されたことに感謝しつつ、北星学園大学創立20周年記念号にこの拙稿を投稿しうることを望外の喜びとするものである。

1. ロシア貿易の趨勢

まず19世紀～20世紀初のロシア貿易の趨勢について概観してみよう(図1, 2, 表1参照)。

輸入は1810年代後半より、また輸出は1830年代前半よりゆるやかな増加傾向に入っている。1854年と55年に、クリミア戦争のために、貿易(とりわけ輸出)が激減したのを除けば、60年代前半までこの傾向にさしたる変化はない。

60年代後半以降も、輸出に関しては、さほど大きな傾向の変化はみられない。ただ、60年代後半以降増加のテンポが速くなる。90年代に一時的な落込みが2回程生じただけである。つまり、19世紀～20世紀初のロシアの輸出貿易は、年による変動をならせば、一時的な減少はみられたものの、終始増加傾向にあり、とりわけ1860年代後半以降急激に伸びていったのである。

いっぽう、60年代以降の輸入は、時期によって、かなりの傾向の変化がみられる。ひとつは、60年代後半～70年代前半における急激な増加傾向である。それは輸出の増加率をはるかに上まわるものであった。もうひとつは、80年代～90年代前半にみられる減少傾向である。それはかなり著しいものであった。そして、90年代後半～1913年の時期は、1900年恐慌時にわずかの減少を示すのみで、全体としては再び急激な増加傾向に入る。

次に、19世紀～20世紀初の貿易収支について。3つの時期に区分され

よう。第1期（世紀初～1860年代前半）は、やや黒字基調であるが、輸出入がほぼ均衡している。第2期（1860年代後半～70年代前半）は構造的な輸出超過の時期である。その原因は、輸出の減退にでなく、輸出の増加を上まわる急激な輸入増加にあった。第3期（1870年代後半～1913年）は、逆に、構造的な輸出超過、しかも大幅な黒字を示す時期である。第1次大戦直前の経済高揚期においても、もはや第2期とは異なり、貿易収支は大幅な黒字である。以上、19世紀～20世紀初のロシア貿易の趨勢について、大まかな特徴づけを行なった。

2. 貿易品目

最初に、貿易品目を食料品、原料・半製品、生獣、製造品の4グループに分類して、貿易構造の推移を調べてみよう（表2参照）。

まず注目すべきは、ロシアの貿易において、「一次産品」（食料品、原料・半製品、生獣）が一貫して大きな割合を占めている点である。19世紀～20世紀初を通じて、輸出では9割以上、また輸入においても6～8割を占め、しかも、輸出入とも、一次産品の割合が傾向として増加の方向にある。これまでも指摘されてきたように、ロシアの貿易構造は、輸出が農業国型、輸入が工業国型という特異な性格をもち、しかもその特徴が年々顕著になっているのである。

その一次産品の中で、大きな変化が主じている。19世紀初めには、輸出では原料・半製品が圧倒的、輸入では食料品が第1位にあったのが、1880年代以降、輸出では食料品が、輸入では原料・半製品が他を圧するようになる。

なお、製造品の輸入が総額の3割程度を占めるのは、ほぼ一貫した現象であった。

さて、1880年代以降ロシアの輸出貿易を主導するようになる食料品の中で圧倒的な割合を占めた品目が穀物であった。例えば、1900年の輸出総額の42.8%が穀物である（ポクロフスキー、XXXVIページ）。いっぽう、輸入される原料・半製品のうち主要な品目は綿花と石炭であった。1900年の輸入総額に占める割合は、それぞれ10.9%と6.7%である（ポクロフスキー、XXXVIIページ）。なお、輸入製造品の重要品目は機械で、

1900年の輸入総額の12.3%を占めている（メンデリソン，邦訳『恐慌の理論と歴史』4，435ページ）。以下で，各品目についてより詳細な検討を行なおう。

a. 穀物

輸出総額に占める穀物の割合，及び穀物の輸出額全体に占める各種穀物の比重を調べてみよう（表3）。

1860年代後半～70年代後半に穀物の輸出割合が急激に増えた後，80年代以降は，漸減気味ではあるが，輸出総額中，穀物の占める割合は5割前後と安定している。

穀物の種類別にみると，当初，小麦が圧倒的比重を占めていたものの，穀物の輸出割合が急上昇した70年代後半には，小麦の比重が低下して，かわりにライ麦とエン麦の比重が大きく増えている。しかし，世紀末に近づくにつれ，再び小麦の比重が上昇し，また大麦の比重も増え，逆にライ麦とエン麦の比重が低下した。この傾向は第1次大戦直前まで続く。1909～13年平均の輸出量は小麦258.7（100万ブード。以下同じ），大麦227.0，ライ麦40.0，エン麦66.4であった（農業総合研究所『世界農産物貿易統計集（第1次大戦前）』昭和53年，3～7ページ）。

なお，60年代後半～70年代後半における穀物輸出の急増が，ライ麦とエン麦の輸出増によるところ大であったという点はそれ自体注目に値する。

次に，収穫量に対する輸出量の割合を検討してみよう（表4）。

2つのグループに分けられる。ひとつは小麦と大麦のグループで，輸出量/収穫量の割合が年によって大きく変動しているが，輸出量は年々着実に増えている。もうひとつはライ麦とエン麦のグループで，割合はほぼ一定しているが，輸出量が年によって激しく変動している。つまり，小麦・大麦は収穫量の変動にさほど影響を受けることなく輸出が増加していったのに対して，ライ麦・エン麦の輸出量は収穫量によって規定されていたということである。当時ロシアでは，小麦は主として輸出向に生産されたのに対して，ライ麦は大衆消費食料であった（ポクロフスキー，15，21ページ）。

では，ロシアの穀物はどのような国に輸出されたのであろうか（表5）。

この種の輸出統計は，再輸出を考慮していないので，必ずしもその

国が最終消費地であるとは限らない、という制約をもつ。特に、オランダに輸出されたロシア穀物の相当な部分がドイツに再輸出されたと思われる。

従って、大まかではあるが、次のようなことは言えるであろう。

穀物輸出全体を通じて言えるのは、イギリスの比重の著しい低下であり、逆にドイツ・オランダの比重の上昇である。

穀物の種類別に輸出動向の特徴をみた場合、2つのグループに分けられよう。ひとつは小麦・大麦のグループで、そこではイギリス・フランスの比重の低下、ドイツ・オランダ・イタリアの比重の上昇が特徴的である。もうひとつはライ麦・エン麦のグループで、イギリスの比重の低下、オランダの比重の上昇が顕著である。

b. 綿花

綿花の輸入動向は表6に示されるとおりである。

1860年代前半を除いて、19世紀を通じて、綿花輸入は一貫して増加している。このように全体として増加傾向にあるなかで、飛躍的に増加している時期が2つある。ひとつは40年代後半で、もうひとつは80年代前半である。このような推移の主たる原因は、関税政策の変化にではなく、ロシア綿工業の発達状況にあると思われる。なお、1860年代前半の輸入減は、アメリカの南北戦争によるものであった。

ロシアが綿花を輸入した相手国についてみてみよう(表7)。但し、相手国別輸入統計は、ロシアに向けて最終的に荷物の積換えがなされた国名でもって記録されている。1896年以後の合衆国産品目は例外である。このように、資料に限界はあるが、大体の傾向は把握できよう。

イギリスとドイツからの輸入分には、合衆国産綿花が含まれていると思われるので、19世紀後半～20世紀初めにおける、ロシアへの主たる綿花供給国は、ほぼ一貫して合衆国であったといえよう。ただ、80年代後半～世紀末にエジプトがかなりの量を供給していた点、そして第1次大戦前ともなるとペルシアが一定の比重を占めるようになる点にも一応配慮すべきであろう。

c. 石炭

石炭の輸入動向は、80年代の初めに大幅に増えた後、84年以後92年まで減傾向にあり、93年以後再び増加してゆく(表8)。

このような動向は、輸入関税政策の推移とほぼ一致している。つまり、1884年に、輸入石炭に対して関税が本格的にかけられるようになり、以後、1891年まで税率が次第に引き上げられてゆき、そして1894年の協定関税で再び税率が下げられるのである（ポクロフスキー、224ページ）。このような一致は、綿花輸入の場合にみられなかったことである。背景に、自給率の着実な上昇に示されるロシア石炭業（特に南部のドネツ炭田）の発展があった。

但し、バルト海沿岸地域では、南部からの石炭輸送の不便さの故に、外国産石炭への根強い需要が存在していた。90年代後半に、輸入石炭の絶対量が増大してゆくゆえである。

外国産石炭としては、イギリスからのものが他を圧している。この傾向は80年代後半～90年代を通じて変わらない（表9）。

d. 機械

機械輸入の動向（表10）は、石炭の場合と同様、関税政策の推移とほぼ一致している。

1870年代は、鉄道関連の機械器具を除いてほとんどの機械が無関税輸入を認められていたこと、及び国内での工業化の進展にともなう外国産機械への需要の高まりに支えられて輸入が急増する。しかし、1881年に工業用一般機器、1885年に農業機械の輸入に対して関税が課せられ、しかも税率が引上げられてゆくなかで、機械の輸入は大きく落ち込むことになる。80年代に農機具以外の機器の輸入が激減した背景には、鉄道建設を楨干とした工業化政策が頓挫したという状況が存在したことも事実である。そして、機械の輸入が重量、金額ともに70年代後半の水準にまで回復するのは、94年の関税率引下げ以後のことになる。

ロシアが機械を輸入した相手国としては、当初、農機具を除く主として工業用の機械・器具はイギリス・ドイツから、農機具はドイツ・イギリス・オーストリア＝ハンガリーからであったのが、世紀末に近づくにつれ、両分野におけるイギリスの衰退、ドイツの優位が益々顕著になってゆく。なお、農機具の分野で合衆国の進出が或る程度みられる（表11）。

3. ロシアの貿易相手国

これまでは、品目別にロシアの貿易構造の特徴をみてきたが、ここでは、相手国別に貿易構造の特色を検討してみよう。

まず、主要な貿易相手国はどこであったのか(表12参照)。主要輸出国では、80年代まで基本的にイギリス・ドイツ・フランスの順であり、90年代以後はドイツ・イギリス・フランスと変化する。特にドイツの比重増大が70年代以後著しい。輸入では、50年代まで基本的にイギリス・ドイツ・フランスの順であった。1851—60年のイギリス、フランスの年平均輸入額が大きく落込んでいるのはクリミア戦争時の貿易途絶のせいである。しかし輸入においてもドイツの伸長著しく、60年代以後、ドイツ・イギリス・フランスの順になる。特に、70年代と1911—13年における、ドイツからの輸入増加が目覚ましい。

次に、各相手国との貿易収支に目を転じてみよう(表12)。

対英貿易は、ロシアにとって、19世紀～20世紀初めを通じて、大幅黒字である。特に80年代以後は、90年代に60年代の水準に一時的に戻るものの、輸出超過が顕著である。

フランス、オーストリア=ハンガリーとの貿易も、一時的に小幅の赤字を示すことはあるが、全体としては黒字基調である。

しかし、対独貿易は、80年代と90年代を除いて、全期間を通じて、かなりの輸入超過となっている。とりわけ、ドイツからの輸入が急増した70年代と1911—13年には、7000万ルーブリをこえる貿易赤字である。

他に、ロシアにとって貿易収支が恒常的に赤字なのは中国と合衆国であった。特に、19世紀末葉の対米貿易は、当時の相手国別貿易収支中最大の赤字を計上している。

次に、相手国毎の19世紀末の主要貿易品目について概観しよう(ポクロフスキー、XX XIX—X L IIページ)。

対ドイツ貿易

輸出品：穀物153.85(100万ルーブリ。1898年の数値。以下同じ)、木材製品55.42、亜麻21.48等々。

輸入品：機械及び部品37.0、機械以外の金属製品19.5、羊毛19.1、未加

工鉄12.0等々。

対イギリス貿易

輸出品：穀物，卵，亜麻，油粕，マンガン鉱等々。

輸入品：機械・器具27.5（100万ループリ。1898年の数値。以下同じ），
未加工の金属14.0，石炭・コークス10.8等々。

対フランス貿易

輸出品：主に穀物。

輸入品：火酒・ワイン6.0（100万ループリ。1898年の数値。以下同じ），
羊毛2.28，絹2.37等々。

対オーストリア=ハンガリー貿易

輸出品：穀物12.0（100万ループリ。1898年の数値。以下同じ），卵8.8，
亜麻4.7，灯油1.5等々。

輸入品：機械3.7，木材製品2.8，コークス1.7等々。

対オランダ貿易

輸出品：穀物，種子等々。

輸入品：金属及び金属製品，染料等々。

対北欧（デンマーク，スウェーデン，ノルウェー）貿易

輸出品：穀物，バター，種子等々。

輸入品：機械，鉄鋼船，漁類等々。

対イタリア貿易

輸出品：穀物，砂糖，石油等々。

輸入品：絹，果物・野菜，オリーブ油等々。

対スペイン貿易

輸出品：穀物。

輸入品：ワイン，オリーブ油等々。

対トルコ貿易

輸出品：穀物，砂糖，石油製品。

輸入品：果物，タバコ，オリーブ油。

対合衆国貿易

輸出品：羊毛，皮革等々。

輸入品：綿花（4100万ループリ。1898年の数値），機械器具（280万ルー
プリ）等々。

19世紀～20世紀初めにおけるロシアの外国貿易

対中国貿易

輸出品：綿製品。

輸入品：茶，絹及び絹製品等々。

対エジプト貿易

輸出品：小麦及び小麦粉，木材，石油。

輸入品：綿花（1880万ルーブリ。1898年の数値）。

対ペルシア貿易

輸出品：砂糖，綿織物等々。

輸入品：果物・野菜，米，絹織物。

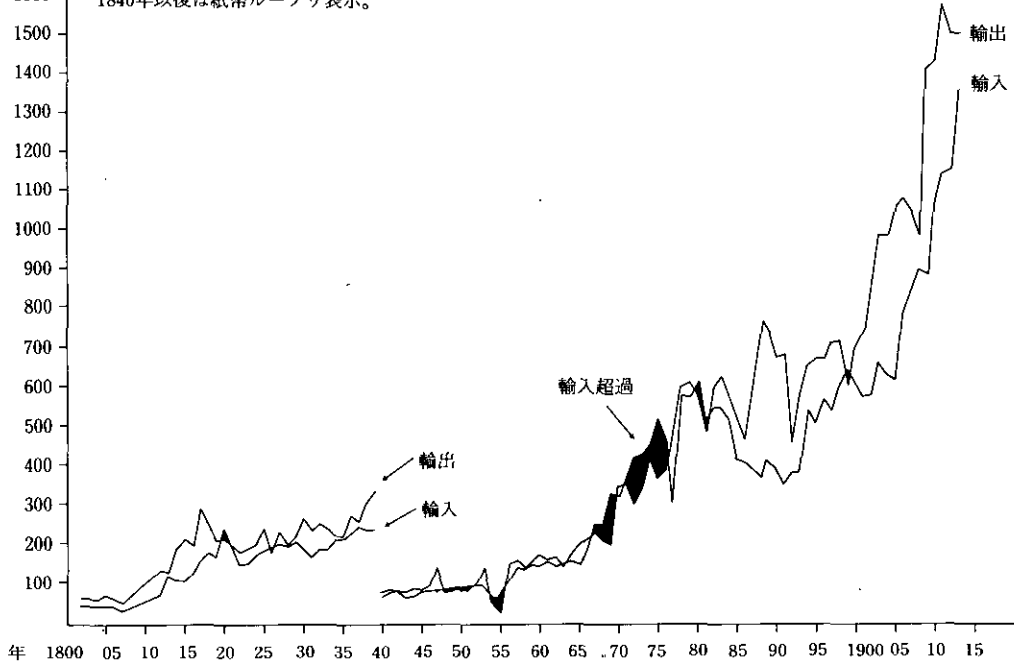
結びにかえて

以上、「研究ノート」というかたちで、19世紀～20世紀初めにおけるロシア外国貿易のありようを、まずは大まかに把握することに努めた。それは、今後ロシア資本主義の貿易問題を研究してゆくうえでの、一準備作業である。従って、もっぱら資料・統計の語るところに耳を傾けるといふ姿勢をとり、筆者なりの評価・見解はなるべくさしひかえた。「研究ノート」としたゆえんである。

図 1

(100万ループリ)

出典, B. R. Mitchell, *European Historical Statistics 1750-1970*, London 1975, p. 488, 491, 496
1839年まではアッシグナーツィア・ループリ表示。
1840年以後は紙幣ループリ表示。



19世紀～20世紀初めにおけるロシアの外国貿易

図 2

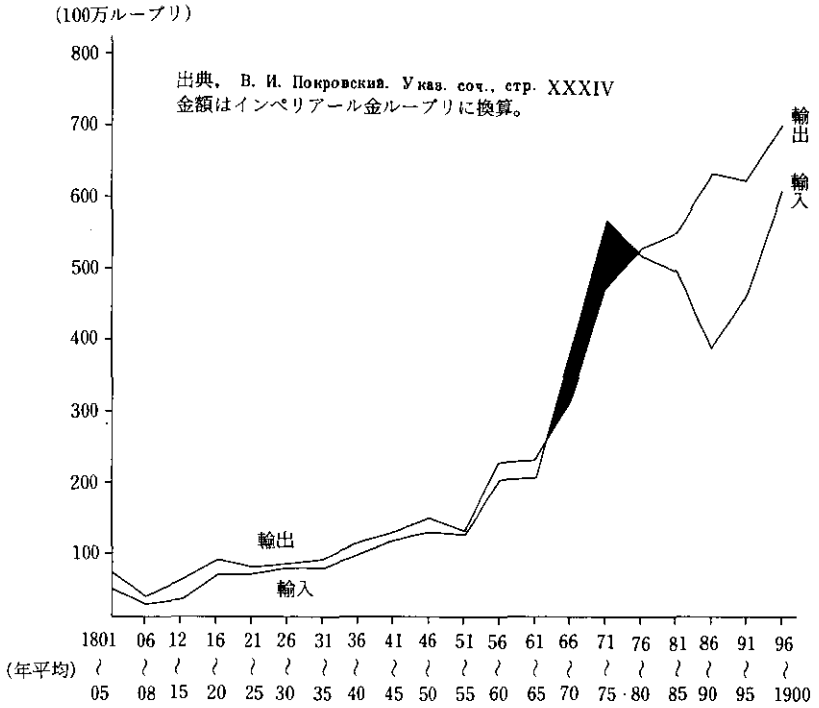


表 1

5年間の平均	輸 出	輸 入
1801-05	75.1	52.8
1806-08	43.2	31.8
1812-15	62.0	39.1
1816-20	91.7	70.0
1821-25	81.4	72.3
1826-30	85.7	80.0
1831-35	94.3	81.0
1836-40	118.4	101.1
1841-45	132.3	119.9
1846-50	151.8	131.5
1851-55	133.2	130.0
1856-60	225.6	205.9
1861-65	225.9	206.7
1866-70	317.3	317.8
1871-75	470.6	565.8
1876-80	527.3	517.8
1881-85	549.9	494.3
1886-90	630.9	392.4
1891-95	621.4	463.5
1896-1900	698.2	607.3

単位 100万ルーブリ (インペリアル
金ルーブリに換算)

出典 В. И. Покровский. Указ. соч.,
стр. XXXIV

表 2

	1002-04年		1872-76年		1882-86年		1896-98年		1909-13年	
	輸出	輸入	輸出	輸入	輸出	輸入	輸出	輸入	輸出	輸入
食 料 品	19.4%	39.0	52.0	23.8	60.0	24.0	58.2	17.3	60.5	18.1
原料・半製品	70.1	24.0	43.2	47.0	35.4	56.1	35.5	52.7	33.2	48.6
生 産 品	2.1	1.8	3.4	—	2.8	—	2.3	0.6	1.8	1.0
製 造 品	8.4	35.2	1.4	29.3	1.5	20.0	4.0	29.4	4.5	32.2
計	100.0%	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

出典 В. И. Покровский. Сборник сведений по истории и статистике внешней
торговли России. Том 1, Спб., 1902, стр. XXXVI.

伊藤昌太「旧露資本主義における貿易問題(中)」(『福大史学』6, 1968年) 11ページ

19世紀～20世紀初めにおけるロシアの外国貿易

表 3

年 平 均	輸出総額中の 穀物の割合(%)	輸出穀物全体に占める主要穀物の割合 (%)							
		小 麦		ライ麦		大 麦		エン麦	
		金額	量	金額	量	金額	量	金額	量
1802-07	18.7								
12-15	10.5								
16-20	31.2								
21-25	8.4								
26-30	15.7								
31-35	15.4								
36-40	14.8								
41-45	16.4								
46-50	31.2								
51-55	29.7	64.2	59.2	15.6	16.7	3.3	3.6	3.8	5.0
56-60	35.1								
61-65	33.2								
66-70	39.7								
71-75	48.0								
76-80	56.2	47.1	38.5	26.1	29.0	5.7	7.5	12.4	14.9
81-85	52.5								
86-90	51.5								
91-95	48.6	45.5	38.8	12.1	12.9	15.3	21.0	12.1	13.0
96-97	47.6	53.4	43.5	12.6	15.3	12.8	17.2	9.4	11.2

出典 В. И. Покровския. Указ. соч., стр. 3, 14

表 4

	小 麦		ライ麦		大 麦		エン麦	
	輸 出 量 (100万ブード)	割合	輸 出 量 (100万ブード)	割合	輸 出 量 (100万ブード)	割合	輸 出 量 (100万ブード)	割合
1871-75	92.1	40.0%	53.8	8.0			23.9	7.3
76-80	110.5	56	83.2	12.5			42.7	12.7
188 3/4-87/8	132.6	46.1	74.9	9.5	49.3	35.2	57.0	15.2
88/9-92/3	153.5	57.6	59.5	8.9	57.5	37.8	46.3	14.7
93/4-97/8	215.8	51.9	78.9	9.0	108.9	42.0	65.1	14.7

出典 В. И. Покровский. Указ. соч., стр. 16-17, 21, 25, 27-28

表 5

重量比 (%)	1866-70年平均				1886-90年平均				1909-13年平均			
	小麦	ライ麦	大麦	エン麦	小麦	ライ麦	大麦	エン麦	小麦	ライ麦	大麦	エン麦
イギリス	56.3%	38.5	62.5	72.8	42.5	28.1	51.4	54.5	18.2	7.4	9.7	27.1
ドイツ	6.0	41.5	7.9	11.1	7.6	23.5	11.6	12.0	8.3	23.2	59.0	16.1
フランス	20.8	0.6	4.3	9.9	11.9	0.9	2.7	8.6	12.0	1.2	1.0	12.9
オランダ	0.1	6.5	14.9	1.3	7.0	17.3	12.9	10.8	22.3	41.7	18.3	30.4
イタリア	7.3	0.5	0.2	0.7	13.6	0.9	1.3	1.0	20.2	1.0	0.4	1.2

出典 農業総合研究所『世界農産物貿易統計集(第1次大戦前)』昭和53年、3-7ページ

表 6

年 平 均	重 量 (100万ブード)	金 額 (100万ルーブリ)	関 税 収 入 (100万ルーブリ)
1821-25	0.07	2.0	
26-30	0.1	2.3	
31-35	0.1	4.1	
36-40	0.3	8.0	
41-45	0.5	2.8	
46-50	1.1	7.1	
51-55	1.5	8.7	0.4
56-60	2.4	18.2	0.6
61-65	1.1	15.0	0.2
66-70	2.6	35.3	
71-75	4.0	47.8	無 関 税
76-80	5.0	50.8	無 関 税
81-85	7.1	78.6	5.0
86-90	8.2	80.0	10.5
91-95	8.6	73.1	18.5
1896	8.4	72.2	25.8
1897	9.1	66.9	27.8

出典 В. И. Покровский. Указ. соч., стр. 274

- 註 ・1850年までは輸入全体。1851年以後はヨーロッパ経由の輸入のみ。
 ・1839年までの金額表示はアッシングナーツィア・ルーブリ。1840年以後は紙幣ルーブリ。
 ・1879年以後、再び関税が課せられる。

19世紀～20世紀初めにおけるロシアの外国貿易

表7

年平均重量比	1851	1861	1866 -70	71 -75	76 -80	81 -85	86 -90	91 -95	1896	1897	1909 -13
	%										
合衆国	14.5	22.7	3.2	19.7	10.0	37.6	40.7	38.3	60.9	57.7	43.3
エジプト	—	—	—	—	—	—	12.7	25.9	21.9	30.1	4.4
イギリス	70.0	61.0	40.6	22.6	17.6	10.8	18.6	16.3	3.9	1.0	10.2
ベルシア	3.0	0.06	7.1	4.5	4.6	5.1	8.6	5.7	8.2	7.8	13.1
ドイツ	5.8	12.2	41.0	26.4	15.9	14.7	12.7	5.8	0.5	2.0	19.4
ブラジル	—	—	1.3	15.2	36.6	—	1.9	0.8	2.8	0.07	—

出典 В. И. Покровский. Указ. соч., стр. 275

但し、1866-70と1909-13は、農業総合研究所「世界農産物貿易統計集（第1次大戦前）」、昭和53年、17ページ

表8

	輸入量 (100万ブード)	消費量 (100万ブード)	自給率 (%)
1870-74	61.2	123	50
75-79	69.5	221	69
82-83	122	358	66
84-86	114	374	69.5
87-89	110	434	75
1890	107	474	77
91	107	488	78
92	102	526	81
93	122	587	79
94	138	673	79.5
95	137	692	80
96	143	716	80
97	154	838	82

出典 В. И. Покровский. Указ. соч., стр. 225

メンデルソン、前掲書、421、423、433ページ（但し、1870-74、75-79年について）

表 9

(100万ブード)	イギリス	ド イ ツ	オーストリア ＝ハンガリー
1886-90	89.9	16.7	2.2
91-95	97.9	15.8	5.1
1896	107.5	26.1	5.4
97	110.2	31.3	7.2

出典 В. И. Покровский. Указ. соч., стр. 226

表10

	農機具以外の機械・器具			農 機 具			機械・器具全体		
	重 量 (100万ブード)	金 額 (100万ループリ)	関税収入 (100万ループリ)	重量	金額	関税収入	重量	金額	関税収入
1851-55		2.1			.			2.1	
56-60		7.5			.			7.5	
61-65		7.4						7.4	
66-70		16.9			1.2			18.1	
71-75		27.4	0.7		2.0			29.4	0.7
76-80	6.1	46.7	1.4	0.6	3.2		6.6	49.9	1.4
81-85	1.6	16.9	2.4	0.9	5.5		2.5	22.5	2.5
86-90	1.7	16.3	3.8	0.4	2.2	0.4	2.2	18.5	4.2
91-95	3.2	29.9	7.4	0.7	3.8	0.7	3.9	33.7	8.1
1896	6.4	54.5	13.2	0.8	5.3	0.6	7.2	59.8	13.8
97	6.1	48.3	12.7	0.8	4.3	0.6	6.8	52.6	13.3

出典 В. И. Покровский. Указ. соч., стр. 268

表11

重量比 %	ド イ ツ		イギリス		合 衆 国		ベルギー		オーストリア ＝ハンガリー	
	①農機具以外 の機械器具	②農機具	①	②	①	②	①	②	①	②
1887-91	36.0	45.3	50.4	30.3	0.3	8.3	3.1	-	-	14.0
92-96	43.0	41.7	36.0	29.8	0.5	16.4	7.0	-	-	9.6
1897	55.2	62.5	26.0	16.1	2.0	10.6	9.3	-	-	7.3

出典 В. И. Покровский. Указ. соч., стр. 269

表12

相手国	1832-40年			1851-60			1861-70			1871-80			1881-90			1891-1900			1901-10			1911-13		
	輸出	輸入	輸出-輸入	輸出	輸入	輸出-輸入	輸出	輸入	輸出-輸入	輸出	輸入	輸出-輸入	輸出	輸入	輸出-輸入	輸出	輸入	輸出-輸入	輸出	輸入	輸出-輸入	輸出	輸入	輸出-輸入
イギリス	105.1	71.2	33.9	52.3 (59.3)	28.1 (37.2)	24.2 (22.1)	101.9	64.7	37.2	151.4	126.3	25.1	193.3	97.4	95.9	153.1 (150.6)	114.2 (110.3)	38.9 (40.3)	232.2	113.9	118.3	291.7	144.3	147.4
ドイツ	18.4	39.0	-20.6	18.5 (12.8)	31.3 (20.0)	-12.8 (-7.2)	39.8	79.5	-39.7	132.5	205.3	-72.8	166.0	153.1	12.9	168.1 (179.6)	164.5 (190.7)	3.6 (-11.1)	273.8	292.5	-18.7	433.7	510.7	-77.0
フランス	11.2	17.7	-6.5	10.0 (16.6)	7.7 (11.7)	2.3 (4.9)	18.5	13.0	5.5	42.7	19.8	22.9	40.7	16.8	23.9	57.0 (63.5)	24.9 (25.1)	32.1 (38.4)	71.6	34.1	37.5	89.3	52.7	36.6
オーストリア	13.2	11.6	1.6	6.6 (6.5)	7.0 (4.2)	-0.4 (2.3)	7.6	8.7	-1.1	29.2	22.1	7.1	27.0	20.1	6.9	33.2 (37.1)	22.9 (22.0)	10.3 (15.1)	43.8	25.1	18.7	64.0	31.7	32.3
ハンガリー				5.9 (9.7)	6.8 (9.7)	-0.9 (0)										5.6 (5.8)	38.1 (40.3)	-32.5 (-34.5)						
中国	7.5	7.6	-0.1				4.2	6.7	-2.5	3.3	10.3	-7.0	-	-	-				24.5	70.2	-45.7	26.7	72.3	-45.6
				1846-48												1896-98								
オランダ				8.2	9.4	-1.2										76.8	7.2	69.6						
デンマーク				17.0	0.4	16.6										9.4	3.2	6.2						
スウェーデン				2.2	2.1	0.1										12.9	9.2	3.7						
ノルウェー																								
イタリア				8.2	3.8	4.4										40.8	10.2	30.6						
スペイン				0.7	3.7	-3.0										5.6	4.1	1.5						
ポルトガル				8.4	6.0	2.4										13.9	6.4	7.5						
トルコ																								
合衆国				2.6	6.3	-3.7										2.4	54.6	-52.2						

出典 B. R. Mitchell, op. cit., pp. 555-557

B. N. Покровский, Уна, соч., СТР. XXXVIII

註。1840年まではアッシグナーツィア・ルーブリ。1847年以後は金ルーブリ表示。

○1851-60年の()内は1846-48年平均値。1891-1900年の()内は1896-98年平均値。

NOTE

Russian Foreign Trade in the 19th and the beginning of the 20th Century

Shoichi TOMIOKA

Contents

Introduction

1. The Trend of Foreign Trade
2. Articles of Foreign Trade
3. Foreign Trade with Main Trading Partners

Conclusion